

第 25 期・第 2 回 第二部会 議事要旨

日時： 令和 3 年 4 月 21 日 14:30~16:15

令和 3 年 4 月 22 日 13:00~14:30

会場： 日本学術会議 6-A(1)(2)会議室及びオンライン会議システムも併用 して開催

出席者：(敬称略) 天谷、荒井、五十嵐、池田、池邊、伊佐、磯、市川、遠藤、尾崎、越智、金井、狩野、河岡、川人、神田、神奈木、北川、北島、木村、経塚、熊谷、五斗、後藤、小林、小松、小安、佐々木、佐治、澤、杉本、杉山、高井、高山、多久和、武田、丹下、寺崎、土井、戸田、中嶋、名越、西谷、仁科、西村(正治)、西村(ユミ)、西村(理行)、深田、藤井、藤原、古谷、松田、松本、眞鍋、水口、三谷、光富、三村、宮地、村上、村山、望月、安村、山口、山崎、山本、吉岡、渡辺

議題：

会議の冒頭では、事務局よりオンライン会議の運営について、武田部長より 2 日間の議事内容と進行について、それぞれ説明が行われた。

議題 1. 日本学術会議会員任命問題についての意見交換

文書の位置付けを声明とすることについては、特段異論はなかった。内容に関しては、多数の学協会や大学等から支持されていることを記載してはどうかとの意見があった。またわかりづらく曲解される可能性のある文言についての指摘があった。

こうした意見は 21 日 16 時 30 分から開催される幹事会で報告することとした。

議題 2. 「日本学術会議のより良い役割に向けて」についての意見交換

武田部長が総会での議論を総括した後、当該文書に関して以下のような意見交換を行った。

- ・設置形態について：現形態で任命問題などが起こっているため、現形態が適当という結論には論理展開としては無理があるという意見があった一方、現状以外の選択肢はなく、ベストではないとしてもセカンドベストである、との意見があった。
- ・文章の加筆について：前文に日本学術会議の役割や必要性、業績をもっと記載すべき、本文書の策定を科学技術基本法の改正と関連付けるべき、会員選考プロセスの改善に関してはよりわかりやすい記載が必要、リソースとの関係(現状、ボランティアベース)についてはもっと記載すべき、といった意見があった。
- ・文書の構成について：当該文書が答申的位置づけを持っていることからこの構成が適当という意見があった一方、第 1 章(設置形態)と第 2 章(今後の取り組み)を入れ替えた方がいい、という意見があった。また、読み手からのわかりやすさを考え、

サマリーの必要性やタイトルの変更あるいはサブタイトルの追加が提案された。

これらは会議1日目の幹事会で報告することとした。

なお、会議2日目の会議冒頭において、武田部長より、当該文書の今後の取りまとめのプロセスについての説明があった。

議題3. 二部関連の委員会・分科会の活動報告

生命科学ジェンダー・ダイバーシティ分科会と大規模感染症予防・制圧体制検討分科会、及び基礎生物学、統合生物学、農学、食料科学、基礎医学、臨床医学、健康・生活科学、歯学、薬学の各分野別委員会からこれまでの活動について報告があった。多くの分科会が立ち上がり、すでにいくつかのシンポジウムや学術フォーラムが開催済みまたは予定されていることが報告された。

議題4. 第2部のCOVID-19関連の活動に関する意見交換

武田部長より資料1に基づき、第2部内でCOVID関連の活動に関して情報共有を行ったことや、第2部拡大役員会を開催したことが報告された。さらにCOVID-19に関するこれまでの具体的な取り組みが紹介され、当該分野の検討や情報発信を先導していることが説明された。COVID-19の活動に関するプラットフォームがないことから、幹事会の下にコロナ対応WGを設置し、アンケート調査やHPの改修、学術フォーラムシリーズの企画を進め、タイムリーの情報発信と審議連携のファシリテーションを目指していることが報告された。

部会員からの主な意見は以下の通り。

効果的な検討や情報発信について：免疫学分科会や病原体学分科会との連携、学術フォーラムへの関係省庁関係者の参加、マスメディアを介した正しい情報の発信ルートの確保やマスコミとの双方向の情報共有、情報発信の加速化方策、若手と連携したサイエンスコミュニケーションの改善などが提案された。これについて、望月副会長は、迅速な情報発信として学術フォーラム等を利用し、オンデマンドでいつでも情報を受け取れるようにする、という新たな情報発信の形態もある。また、リソースがあればマスコミとのハブになる組織を日学内に設置することも考えられると述べた。

検討すべきテーマについて：ISCのシナリオメイキングに基づく将来予測への参画、専門家への教育と市民への啓発・リテラシー向上、臨床研究の在り方や緊急時のIC取得を含めた対応、国家プロジェクトとしてワクチン接種の進め方、コロナの波及的影響（医療崩壊や経済への影響）、医療の状況を知る電子システムの活用、病態生理の解析、新たなウィルスの出現など、具体的な提案がなされた。

武田部長は、①学術フォーラムや公開シンポジウムを通じて、日本学術会議から情報発信をする、②いろいろなステークホルダーに情報を届ける、③基本、イベントで用いた資料のHP掲載やイベント概要の「学術の動向」掲載を行い情報を残す、ことを今後の方針とする旨説明し、コロナ対応WGへの参加や学術フォーラム企画等に対する部会員の協力を要請した。

議題5. 第25期の日本学術会議の意思の発出の方針について

丹下副部長から、資料4に基づき、第25期の幹事会では、日本学術会議ならではの意思発出を意識し、人類的、社会的課題として重要なテーマを選び、いろいろな分野が参画した議論をベースに提言や報告を作成することを推奨する旨、説明があった。部会員からは、幹事会や役員から連携すべき分科会や参加するメンバーの紹介があれば連携しやすいとのコメントがあった。

議題6. 夏季部会について

武田部長より資料5に基づき夏季部会について説明があり、今年度は役員が新型コロナウイルス感染状況を考慮して、開催の可否を判断することとした。

議題7. その他

丹下副部長より、学協会の連合体との連携状況について説明があった。また学術会議と連合体の間で共有できる課題があると連携の意義が高まることを念頭に、連携テーマや連携先があれば提案してほしいと要請した。

以上